# 設楽発掘通信

No.6
平成２６年
１１月１日号

## 万瀬遺跡の発掘調査終了

10月14日　田口小学校６年生（１１名）見学の様子

六月から始めました万瀬遺跡（川向所在）の発掘調査は、十月中におおよそ終了いたしました。調査の結果、中世から江戸時代までの屋敷や鍛治工房などの遺構や遺物と、縄文時代の土器や石器など多くの成果を得ることができました。今後は、資材の撤去など若干の現地での作業の他に、出土遺物の洗浄作業と記録した図面や写真の整理作業などを設楽詰所で行う予定です。これまで多くの方々にご支援とご協力をいただき、ありがとうございました。

一方、西地・東地遺跡（大名倉所在）の発掘調査も順調に進んでいます。調査は三調査区に分けて行っていますが、現在はＢ区の中世から近世までの面とＣ区の調査が終盤を迎えています。今後はＢ区の縄文時代の面とＡ区の調査を進めていく予定です。

さて、この西地・東地遺跡では、去る十月四日に地元説明会を開催し、三十二名の方々が参加されました。発掘調査現場では、遺跡の概要、発掘調査の進め方や今回の調査成果などを説明した後、縄文時代の磨製石斧や土器が出土した状態を間近でご覧いただきました。遺物展示コーナーでは、縄文時代の土器や石器、古代から江戸時代の陶器などを熱心に見学していました。

また、この西地・東地遺跡の発掘調査では、さまざまな普及・広報活動が行われました。十月十四日には田口小学校六年生の生徒十一名が遺跡を見学しました。最後の質問コーナーでは、多くの疑問や意見が出され熱心に学習することができました。十八日には「あいち埋文家族の絆づくり事業／第六回家族で歴史を体感」で西地・東地遺跡の体験発掘が行われました。六家族十四名が参加され、熱心に遺物包含層を掘削し、土器や石器が出土するのを目の当たりにして感動していました。

今後も発掘調査の進行に支障が生じない範囲で、このような学校など団体による見学会や体験発掘などの企画を行いたいと思います。ご希望の場合はぜひ一度、愛知県埋蔵文化財センターまでご相談ください。

（愛知県埋蔵文化財センター　鈴木正貴）

# 西地・東地遺跡の調査について

西地・東地遺跡（大名倉所在）では現場説明会（写真1）の後も、引き続きB区の発掘調査を行っています。中近世と縄文時代と大きく二つの時期（面）があるなか、現在は中近世の面を調査中です。調査を進めていく中で、柱穴や炉跡、墓壙の可能性がある遺構が確認されています。また、数か所の遺構で焼土がみつかりました（写真2）。これらの中には近世の鍛冶作業を行った跡の可能性が考えられるものがあります。更に、大きな石が多数みられ、中には石積みの最下段と考えられる集石もあります。

また、遺物包含層や自然流路などから、縄文土器の口縁部から底部までがまとまって出土したり（写真3）、石鏃や斧など石材を石器に加工した際にでる剥片（本遺跡では主に黒曜石や熔結凝灰岩などの破片）が多数確認されています。これらのことを踏まえて今後、縄文時代の様相について明らかにしていきます。

C区では重機による表土掘削が完了し、グリッド（調査区杭）の設置が行われました。C区は自然地形による谷部の流路と考えられますが、遺物包含層からは土器や石器が出土しています。今後はこれらの遺物がどのように埋没していったかを確認していくことになります。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　後藤太一）

写真1　地元説明会写真

写真3　縄文土器出土状況

写真2　被熱範囲（炉跡と考えられます）





# 万瀬遺跡の調査について

空撮が終了した万瀬遺跡では、調査区北西側で確認された配石遺構群の下部構造の補足調査を行っています。最も大きい配石遺構001SXの石を全て取り上げた結果、下部より浅い凹地状の土坑が確認されました（写真1）。さらに、この土坑の底部から土器を伴う集石が見つかりました（写真2、3）。遺物は縄文土器の細片ばかりですが、集石の中に、熱をうけたように赤変した扁平の石が見つかりました（写真4）。よく観察すると、表面には金属製品で敲いたような痕があります。金床石（鍛冶作業の際に、赤熱した鉄を敲く台）かもしれません。

しかし、縄文時代には鉄をはじめ金属製品はまだありません。そのため、この集石は、もっと新しい時代（おそらく鎌倉～戦国時代以降）の遺構の可能性が高くなりました。上部に存在していた配石遺構群も同様です。一緒に出土している縄文時代の遺物は、これらの遺構が掘られる際に、どこからか流れ込んだものと考えられます。もちろん、より下層に縄文時代の遺構が存在する可能性も否定はできないので、最後に下層の確認調査も行う予定です。いずれにせよ、今回の万瀬遺跡での調査では、縄文時代の土器・石器だけで千点近く出土しています。必ず周辺にこれらの遺物を供給する縄文時代の遺構が存在するはずです。来年度以降の調査に期待が募ります。

（ナカシャクリエイテブ株式会社　廣瀬正嗣）

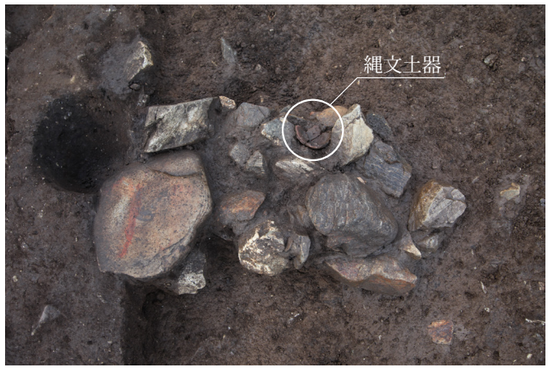



写真3　凹地状土坑（052SK）出土　集石

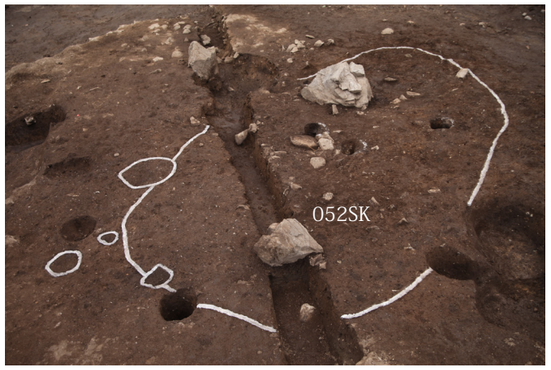



写真1　001SX直下　凹地状土坑（052SK）

写真4　金床石?　白枠内が金属で敲いた痕か?

写真2　凹地状土坑（052SK）　遺物取り上げ風景

# 石鏃などの石器石材について

鏃（矢尻）は、矢の先端の鋭利な部分で、獲物に刺さる部分になります。弓矢の使用は、縄文時代の開始とともに始まり、狩猟活動に大きな変革をもたらしたようです。縄文時代の鏃には石製や骨角製がありましたが、日本列島の土壌では、石製（石鏃）がよく残ります。石鏃は、黒曜石・チャート・下呂石・熔結凝灰岩・サヌカイトなど、様々な石材で作られていました。長い縄文時代の中では、よく使われる石材は一定でなく、時期や地域により様相が異なるようです。

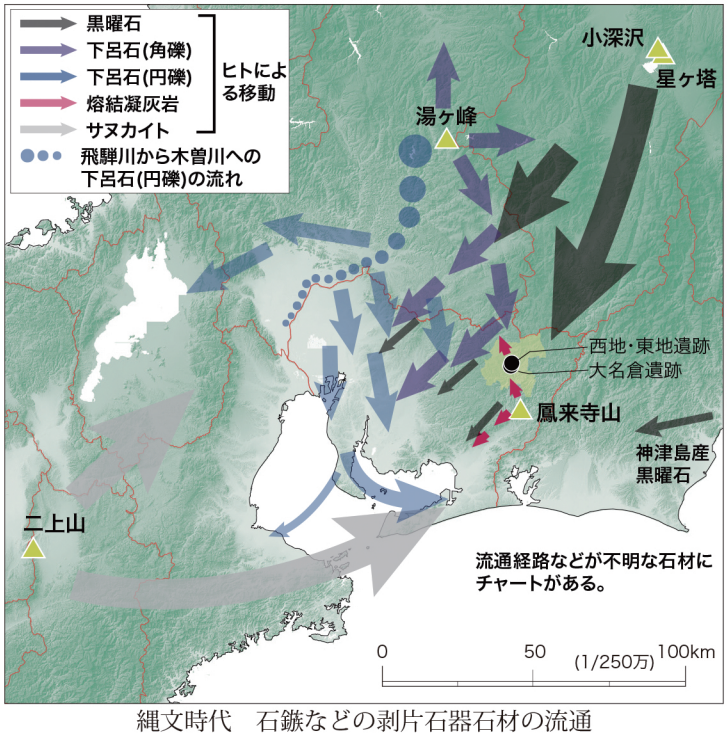
黒曜石は、いわば天然のガラスで、西地・東地遺跡で多く出土しています。製品に加えて素材や作りカスである剥片・石核も出土しています。これまでの設楽町周辺での出土資料の分析結果では、長野県の星ケ塔（霧ケ峰）産が多く、小深沢（和田峠）産や、まれに神津島（伊豆諸島）産もあるようです。

下呂石は下呂市湯ケ峰一帯に広がる流紋岩です。愛知県側の遺跡では、川原石の礫（円礫）と、岩肌の礫（角礫）の両方が出土します。円礫は、飛騨川を経由して木曽川に流れてきたもので、各流域から採取されたものです。角礫は、湯ケ峰付近から陸路で運ばれたものです。奥三河郷土館所蔵の大名倉遺跡採集資料の中には、角礫の礫表面を残す石鏃が認められます。

熔結凝灰岩は、鳳来寺山周辺に岩帯が存在しています。石鏃のみならず、石匙など、ナイフの石材としても利用されます。

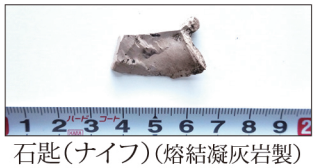
チャートも石器石材としてよく利用されます。石器にはガラス質の強いものが使われていますが、岩石としてのチャートは広く存在しているため、産地などの特定には至っていません。

このように、石器石材の流通ということから見ても、縄文時代には複雑でかつ広域な流通が行なわれていた様子を垣間みることができるのです。（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）




縄文時代　石鏃などの剥片石器石材の流通

石鏃（左 黒曜石製、右 下呂石製）



石匙（ナイフ）（熔結凝灰岩製）

黒曜石の剥片・石核

【写真の遺物は西地・東地遺跡出土です。】


設楽発掘通信 No.6

平成26年11月1日号

編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】 4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力　ナカシャクリエイテブ 株式会社